装束の裁縫技術解明と着装
—束帯—

Elucidation of sewing techniques for costumes and dressing
—Sokutai—

阿部 栄子[1]，中澤 奈々絵[2]，加藤 加苗[3]
Eiko Abe[1], Nanae Nakazawa[2], and Kanae Kato[3]

[1]家政学部被服学科，[2](元)佐藤栄学園 栄東中学高等学校教諭，[3]東京都立八丈高等学校教諭

キーワード：装束，裁縫，着装，束帯
Key words：Costume, Sewing, Dressing, Sokutai

1．研究目的

伝統衣裳や時代衣裳を述べる時，私たちの脳裏にはまず平安時代の代表的な装束として束帯（そくたい）と十二単（唐衣裳・袿形式）が浮かんでくる．このような日本の装束は，千二百年もの長きにわたって伝統を受け継いできた世界でも例のないファッション文化を有している．今日では，着用している装束姿を一番多くみられるのは神社の神主さんをはじめとする神職の世界程度である．しかし，我が国では幸いにも，2019 年に大嘗祭をはじめとした一連の新天皇即位行事が行われた．この行事を通して，改めて長きにわたって伝統を受け継いできた世界でも例のない日本の衣服のファッション画像を目にし，誰もがその衣裳に魅了されました．このような現在，一部で受け継がれている伝統衣裳の形態，その縫製の合理的な一面には，被服学はもとより，被服構成学，なかでも和服裁縫の原点を改めて考えさせられた．これを機会に，脈々と受け継がれる装束（有職織物による装束類）を取り上げ，現存装束の調査と記録を着実に行い，本学の学生教育資料を作成する必要があることを痛感した．

そこで，本研究では本調査を通して貴重な装束資料，特に男子装束の束帯についてトータルに得ることができたので，その一部をここに報告する．

2．研究実施内容

（1）束帯

束帯は，令制における「朝服」が変化したものである．朝延に出勤する際の服装であり，さまざまな着装衣類を最終的に帯で束ね留める着方であることからこの名称が生まれた．現代では，即位の礼および皇族の結婚式などの式の他，伊勢神宮などの特別な儀式で用いられ，脈々と受け継がれている．

（2）着装構成

着装順では，小袖・冠・襪（しとうず）・単・大口袴（おおぐちのはかま）・表袴（うえのはかま）・下襲・（半臂）・裾・袍・石帯・持具（檜扇，帖紙，笏，魚袋）・靴（かのくつ）を履くことで，束帯姿が完成される．

一方で，束帯の特徴は着用目的に応じた使い分けの煩雑さにあるとされる．衣紋道の約束事の殆どは，束帯の着装上の定めであり，山科，高倉両流の差は，袍の着せ方，冠の紐結び，石帯の出し方などに多く見られる（例えば図 1～2 参照）[1)]．

（3）袍

この袍（ほう）は，別名「うえのきぬ」とも呼び，脇が縫合され，裾に襴（らん）のついた縫腋袍と，脇の開いた欠腋袍とがある．また，縫腋袍の背後，腰部には袋が有り，これを格袋（はこえ）と呼んでいるが，着装時はこの格袋を内側に折り返して収める．また，欠腋袍には襴および格袋は縫製されない．

裾には，「襴」と呼ぶ横長の布地を縫いつける．蘭の両端には歩行が楽なように「蟻先（ありさき）」と呼ばれる張り出し部分が存在する．袖は，一幅の奥袖の先に 20cm 幅くらいの布で「端袖」がつけられ，極めて裄丈の長大な袖となる．

この袍は平面に置いた時，首上が見えない側が

（山科流）　（高倉流）

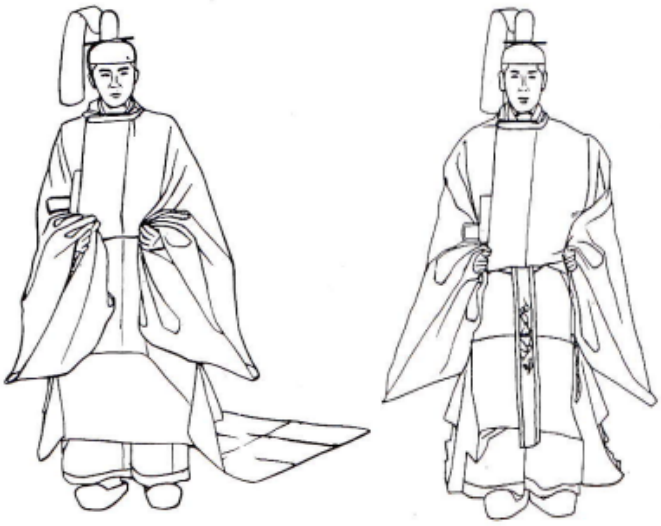

図 1．袍の着装

（山科流）　（高倉流）

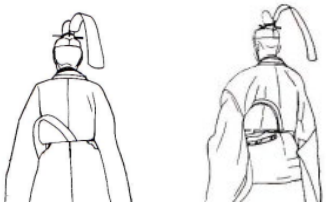

図 2．石帯（背面）

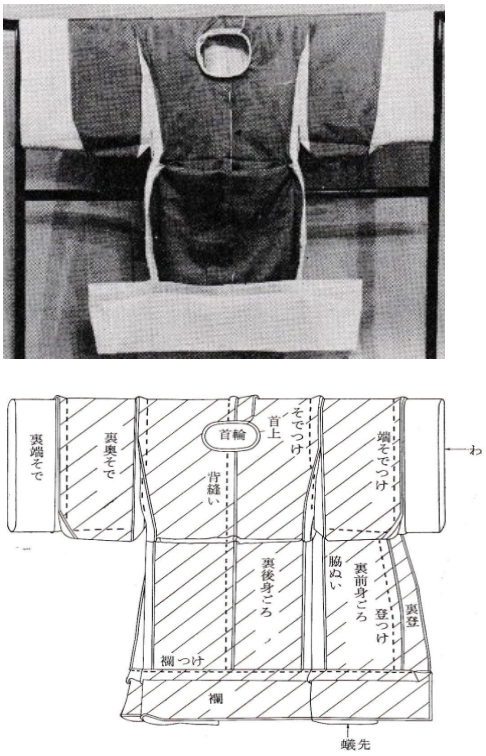

図 3．袍（背面・裏側）

前面で，見える側が後身ごろである．図 3 からも確認できるように，前身ごろに「懐（ふところ）」をつくる余裕分があり[2]，このような形になっている．そのために着装でもここが最大のポイントとなる．

３．まとめと今後の課題

第一段階として，男子装束について被服学および被服構成学の立場からまとめた．次の第二段階として，女子装束について同様にまとめ，装束類（束帯と十二単）の研究として一つのまとまりある有益な伝統文化資料とすることが出来れば，何よりと考えている．そして，本学の貴重な装束資料として，アーカイブ化するとともに教育研究に役立てられると考える．他大学の博物館等や美術館等を調査した結果，装束を有する大学はいくつかあるが，何れも文学，材料学，色彩学的側面からのみの単独的な検討であり，人間が着用するという多面的，複合的見地から捉えようとする研究は見当たらない．このようなことから，被服学を専門とする本学にとっても貴重な伝統文化資料になると考えている．

４．この助成による講演等

[1] 第 17 回きもの文化検定合格セミナー「装束（招待講演）」，昭和女子大学

[2] 第 17 回きもの文化検定合格セミナー「装束（招待講演）」，京都経済センター

付記

本研究は大妻女子大学人間生活文化研究所「共同研究プロジェクト」（K2203）の助成を受けたものである．

引用文献

1) 八束清貫．装束の知識と着法．文信社．1962，p.192-204.
2) 服飾史図絵編集委員会．服飾史図絵．駸々堂．1969，p.269-275.